

東京オリンピック開催も相まって、「観光」や「インバウンド」という言葉が大きく意識されるようになってきている。地域においても、人の交流による気づきや意識の変化、移住・定住、そして経済的な波及効果などその効果が期待されている。こうした「観光」は地域文化を「活用（使う）」するもので、これを持続・発展させることにも寄与する。しかしながら、その地域文化の「つくり手」たちはたとえば、大きな見返りや直接的な利益を二の次にして、長い年月から見た意味を見出し、自らの生き様と重ねていることに、今号の取材を通して強く感じるようになった。そして、もう一つ、こうした文化のつくり手たちの所には、世界各地の文化のつくり手たちとの窓口があるということだった。すぐに利益を求めず、安易に迎合せず、そうした人たちが地域文化をつくり続けている。

これからも、全国地域ミュージアム活性化協議会では、文化資源を活かすと共に、独自の考え方をもち、地域文化を創造してきた人たちのさまざまな取り組みを取材し、地域文化振興に寄与していきたい。



目次：1…大原美術館／6…対談「地域文化のつくり手から」／15…瀬戸内サーカスファクトリー／17…小泉八雲記念館

地域ミュージアム

Fountains of Wisdom

全国地域ミュージアム活性化協議会機関紙 vol.3

発行 全国地域ミュージアム活性化協議会

〒690-2801 島根県雲南市吉田町吉田 2621 番地

TEL.0854-74-9058

大原美術館

— 今を生きる美術館 —



でした。絵画や美術との出会いはヨーロッパ赴任中に、各地の美術館をまわったことです。それまでは興味のなかった絵画でしたが、『名画を見る眼』（高階秀爾著）をテキストにしながら楽しむようになりました。何かのめぐりあわせか、今、その高階館長とともにここに一緒にやっています。

海外でのご経験が長いと、昨年のG7倉敷教育大臣会合などでも役立つのでは？

はじめて美術館の分館で歓迎レセプションを開きました。分館を会場としてこのようなパーティを開催したのは初めてです。通常は、現代アートの彫刻などがあるスペースです。隣の倉敷国際ホテルからテーブル、椅子、料理を運んでお迎えをしたわけです。着座で80



G7倉敷教育大臣会合の様子

人々90人ぐらいで、見通しも利いていい雰囲気だったようで、ご満足いただけたようです。

どのようにして会場を提供することに？

お迎えする倉敷市長からの強い要請があり、地域とともに生きる使命を持つ大原美術館として会場提供を承諾しました。

民間である大原美術館と行政である倉敷市との境目があまりないような？

もともとは天領の町で、町衆が「お上」の意向をあまり気にせずにどんどん自分たちでやるという文化が倉敷にはあります。お祭りなどもそうで、一番典型的なのが秋の屏風祭り。江戸時代の頃は地元の阿智神社にお参りに来た皆さんに、それぞれの家を休憩所にして屏風を飾っておもてなしをした、という言い伝えがありました。これを復活しようと、地元の人たちが言い出して、市を巻き込んでいくわけです。軒先に屏風を飾って皆さんに自由に入って見ていただくというお祭りを行政と一緒にやっています。ですから、公的な意識をもった町衆と言うか市民と、民間的なマインドをもった官公庁、そのミックスがいろいろなイベントでも上手くいく秘訣ではないかと。

美術館として屏風祭りとどう関わっているのですか？
屏風祭りを始めた頃、屏風の扱いや展示の仕方を学芸員が支援していました。「うちにはこんな屏風があ

1930（昭和5）年、日本で最初の西洋近代美術館として倉敷に誕生した大原美術館。倉敷を基盤として事業家・大原孫三郎の生涯の親友であり、画家であった児島虎次郎が収集した西洋絵画や東洋の美術品及び児島の作品を収蔵・展示し、前年に死去した児島を記念して設立された美術館である。その後も西洋の近代から現代の美術、日本の近代から現代の美術、民芸作品などコレクションの幅を広げ、ユニークな民間総合美術館として知られている。教育普及活動も活発であり、子ども、社会人とも絵画や美術品だけでなくコンサートやインスタレーションなど、諸芸術に触れる多彩な活動を展開している。

地域における文化事業を先駆的に実施し続けてきた大原美術館には、「ミュージアムからのまちづくり」を理念とする当協議会へも昨年より参画いただいている。この度、虫明副館長より、最近の活動やその背景、美術館の考え方について、改めてお話を伺った。

虫明副館長は、どのようにして美術館へ？

もともと、中国銀行におりまして、前任の副館長退任の際に中国銀行へ話があり、ちょうど私が年齢的にも適切だということ（笑）。12年ほど前のことです。中国銀行では国際業務を長年担当してきました。大原謙一郎名誉理事長と最初に対面したのもニューヨーク

るよ」と言っても、それまでほとんど出さないようなもので、それらを調べたり、修復など手入れが必要だったり。いろんな形で当館の学芸員がお手伝いをしてお披露目できるようにしました。

また、その時、大原美術館は有隣荘を特別公開します。これは大原家の旧別邸で、美術館が管理させていただいているんですが、秋の屏風祭りの時に特別公開します。有隣荘は年2回公開しています。1回は現代アートのアーティストをお招きしてインスタレーション的に、作品の展示などを行い、もう1回は学芸員が所蔵品を駆使して展示をしています。今年の春は「耳を澄まして」と、「音」「音楽」を切り口に作品を並べてみました。秋には宮永愛子さんをお招きして現代アートの作品を展示することになっています。



上) 秋の屏風祭り 下) 有隣荘

瀬戸内サーカスファクトリー



瀬戸内サーカスファクトリー代表 田中 未知子氏

瀬戸内サーカスファクトリーの設立

現代サーカスを通して、生活に根づいた芸能文化を取り戻す。強い信念を持つ若きリーダーとの出会いがあった。3月、私たちは香川県高松市のとある図書館を訪ねた。その名も「サーカス図書館」。サーカスにかかわる蔵書が集められている。ここは、現代サーカスを創造して世に送り出している瀬戸内サーカスファクトリーの活動拠点である。

現代サーカスとは、サーカスの要素を取り入れながら、作品全体に一貫したテーマやメッセージ性を持たせて一つの作品を描き出す舞台芸能である。

瀬戸内サーカスファクトリー代表の田中未知子氏は、北海道の新聞社で担当していた文化事業を通して現代輝でける場が限られています。現代サーカスをツールとして、人は身体一つで、自分でも気がつかなかったような力を発揮することができます。その点で、昔の芸能と私たちの現代サーカスはつながっているんです。」と田中氏は語る。

文化の地域分権

瀬戸内サーカスファクトリーの活動は2017年で5年目を迎える。節目の年に想いを新たに、活動拠点を高松市内へ移転する予定だ。田中氏の信念と情熱が周囲を動かし、現在では瀬戸内サーカスファクトリーの活動運営にはおよそ10名のメンバーが参画しているという。

「地域に根ざした文化を創る、それには時間がかかることは承知しています。すぐに形になるものではありませんが、絶対に実現できると確信しています。」瀬戸内サーカスファクトリーの目指す「文化の地域分権」は決して夢物語ではない。2016年12月にEU圏のサーカスや大道芸関連団体が加盟するネットワーク「シルコ・ストラダ」の視察団が来日した。その際、真っ先に受入についての連絡があったのが瀬戸内サーカスファクトリーだった。田中氏がコーディネーターを務め、来日時には東京と香川の滞在が半分ずつを占めるスケジュールになったという。

地域に新しい文化が生まれることは決して地域資源からだけではなく、文化を創り育てようとする人の力によっても生み出されるものであり、新しい文化が歴史や文化、そして人々の生活や生き方から生まれてくるという現実に触れることができた。そし

サーカスと出逢い、その世界に魅了された。会社を退職して現代サーカス発祥の地・フランスに渡り、取材・執筆活動を経て帰国。2010年に瀬戸内国際芸術祭で舞台芸術部門を担当したことが、瀬戸内との縁の始まりだった。翌2011年に高松市に移住し、独立。作品制作・公演プロデュースを中心に取組み、2014年に一般社団法人瀬戸内サーカスファクトリーを設立して現在に至る。



サーカス図書館

新しい地方の文化を生み出す

「私たちは、地方でこそ一流の文化が生まれるべきであるという信念を持っています。昔から生活に密着して育まれてきた祭事や芸能、その根っこに存在する祈りの文化。瀬戸内には、そうした芸能文化が各地で連綿と受け継がれています。そのため、私たちはこの地を拠点として、現代サーカスが文化として生まれて発展していく仕組みづくりを進めています。」

これまでに香川、徳島、札幌、大阪など全国各地

で、田中氏の活動を通して「世界への窓が地域から開かれる」。そんな未来の訪れを予感せずにはいられなかった。

関係する人材の育成

「フランスでは、国の政策として文化の地域分権が進められています。国内のあちこちに文化拠点があり、有名なフェスティバルが小さな町で開催されているのです。質の高いものを生み出していくことができれば、日本でも地域が文化の拠点になりうる。香川という地方にいなながらも、地域の生活や文化からインスピレーションをいただきながら、そこに文化をつくることができると考えています。」

作品制作と公演に取り組む傍ら、人材育成にも着手している。現代サーカスの公演には、「リガー」と呼ばれる特殊設備を設置する専門技術者の存在が欠かせない。しかし、日本では技術者の数がまったく足りていない状況であった。そこで適任者を探した結果、地元のとび職人にたどり着いた。フランス国立サーカス学校(CNAC)から講師を招へいし、直接指導を受けるサーカス器具設置講習会を高松市にて開催。ゆくゆくは、日本におけるサーカス技術の先駆者として活躍できるよう、技術者育成プロジェクトを進めている。

今後は子どものためのサーカス教室を立ち上げ、小さい頃から現代サーカスに慣れ親しむことができ、環境づくりに取り組んでいきたいと考えている。「人間一人ひとりに、必ず何かの能力が備わっていると思うんです。現代は昔の社会よりもその能力を発



子どもサーカス教室



上) 100年サーカス
下) 人形浄瑠璃とフランス現代サーカスのコラボ創作

小泉八雲 記念館

オープン・マインドの
発信地として



小泉八雲記念館展示室



子ども塾「へるん子ども八景を探そう！」(前列左から5人目が小泉凡氏)

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)と 記念館

1890(明治23)年、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が日本の地を踏み、松江にある島根県尋常中学校に英語教師として赴任した。松江の滞在はわずか1年余りであったが、「日本の面影」を色濃く残す松江の地に深い愛着を覚え、後にハーンを代表する「再話文学」を生み出すことになる。ハーン亡き後、1934年に松江に記念館が開館。80年の時を経て2016(平成28)年、小泉八雲記念館がリニューアルオープンし、ハーンの曾孫であり、民俗学者である小泉凡氏が館長に就任した。

地域の子どもたちへ

記念館リニューアルでは、展示の充実はもちろん、従来はなかったライブラリーとレクチャールームを新設した。島根県立大学の講義等で活用されている。

小泉館長は、十数年にわたって小学生を対象とした「子ども塾―スーパールンさん講座―」で、ハーンにまつわる物語を聞く、下駄の音と感触を楽しむ、虫の音を聞く、スケッチをする、お化け屋敷をつくるなど、多彩な活動を行ってきた。子どもたちの五感を磨き、「開かれた精神(オープン・マインド)」で地域の魅力を再発見することを目的としている。今後は、学校教育とも連携して働きかけていきたいと語る。

また、企画展も積極的に取組める環境が整った。リニューアルオープン直後の企画展は「怪談…再和文学の

永遠性」であり、これに合わせて関連イベントが続けられている。俳優や演奏家による怪談と音楽、紀行文と音楽のステージや、大学生による「おはなし」、中・高生の怪談英語スピーチなどが市内各所で行われている。



上) ライブラリー 下) レクチャールーム

アイルランドの小泉八雲庭園 「トラモアの庭」

ハーンはアイルランド人の父とギリシャ人の母との間に生まれ、ギリシャ、アイルランド、イギリス、フランス、アメリカを経て日本へ渡った。その間にも世界各地を旅している。現在、ハーンが歩いた各地でその足跡が伝えられ、国内でも静岡県焼津市、熊本県熊本市に記念館、富山大学には八雲の蔵書を保管するヘルン文庫がある。小泉館長はハーンを通じた松江と各地とのつながりでもある。2015年、アイルランド南部の小さな保養地・トラモアに小泉八雲庭園がオープンした。これは単なる日本庭園ではなく、Ihaの敷地は、ハーンの人生を辿る9つの庭で構成されている。その

オープニングに併せて、ダブリン・リトル・ミュージアムでのハーンに関する企画展、俳優・佐野史朗氏とギタリスト・山本恭司氏による「小泉八雲・朗読の夕べ」の公演などが行われた。従来、文学作品の多くは愛読者の鑑賞の対象、もしくは研究者の研究対象となることが多かった。しかし、愛好者や専門家ではない多くの人たちが訪れるトラモアの庭のように、文学や作家を地域資源として再創造し、現代の人たちにハーンを伝えるべきだと、小泉館長は語る。



トラモアの庭(アイルランド)

ギリシャ・レフカダ市 「予算ゼロのミュージアム」

ハーンの「開かれた精神」、オープン・マインド・プロジェクトはギリシャでも展開された。

翻訳不要のこの言葉を軸に、2014年、世界5カ国9名の学識者などによるシンポジウムが開催された。そこでも子どもたちへ伝えていこうというところで、レフカダ市役所の空き部屋をミュージアムにすることに決まった。小泉館長らは実行委員会を立ち上げ、ハーンの遺品や蔵書を所有する自治体などに呼びかけ、所有者がレプリカを制作してレフカダ市へ贈った。現在、レフカダ市の予算ゼロでつくられたミュージアムは、年間4千人ほどの子どもたちが遠足や社会科見学で訪れる場所になった。

小泉館長は子どもの頃から旅が好きで家出少年と間違えられるほど各地の田舎町を歩いた。そして、民俗学を専攻することになったが、曾祖父・ラフカディオ・ハーンに向き合いはじめたのは大学院に進学してからだという。自然界の小さな生き物や土地に生きる人々、そして隠されたものへのまなざしを向けたハーンの心に共鳴しつつ、今、ハーンが紡いだ心を新しい形で伝えていこうと挑戦を続けている。

ラフカディオ・ハーン・ヒストリカル・センター(ギリシャ・レフカダ市)

